厚生労働科学研究費補助金

第3次対がん総合戦略研究事業

「ＱＯＬの向上をめざしたがん治療法の開発研究」に関する研究

平成16年度～18年度　総合研究報告書

主任研究者　吉田茂昭

平成19年（2007）年3月

目　次

Ⅰ.総合研究報告書

ＱＯＬの向上をめざしたがん治療法の開発研究に関する研究・・・・・・・・・・・・・・・ 3
吉 田 茂 昭

Ⅱ.研究成果の刊行に関する一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

Ⅰ. 総合研究報告書

厚生労働科学研究費補助金（第３次対がん総合戦略研究事業）
平成 16-18 年度総合研究報告書

QOL の向上をめざしたがん治療法の開発研究

主任研究者　　吉　田　茂　昭　　国立がんセンター東病院長

研究要旨

今期３年間の主な研究成果は以下の通りである。①機能温存手術では喉頭機能温存手術の標準化、N0 乳癌に対するラジオ波を用いた局所治療の展開、進行下部直腸癌（前立腺浸潤例）に対する肛門膀胱温存手術の評価、患肢温存手術の標準化など、②臓器温存療法の開発では、食道がんに対する根治的放射線化学療法の開発と局所再発例に対する内視鏡治療の有効性評価、転移性頭頸部がんに対する新規放射線化学療法の開発など、③QOL の回復をめざす治療開発では下顎再建術式の開発、神経管を用いた神経再生の臨床導入、消化管（食道）の再生技術の開発、IVR による症状緩和の臨床試験の展開などに、大きな進捗が図られた。

分担研究者氏名及び所属施設

吉田茂昭　国立がんセンター東病院
林　隆一　国立がんセンター東病院
井本　滋　国立がんセンター東病院
名川弘一　東京大学大学院医学系研究科
斉藤典男　国立がんセンター東病院
松岡直樹　国立がんセンター中央病院
内田淳正　三重大学医学部
佐々木寛　東京慈恵会医科大学
中塚貴志　埼玉医科大学
山岸久一*　京都府立医科大学大学院医学研究科
萩原明於**京都府立医科大学大学院医学研究科
荒井保明　国立がんセンター中央病院

*：平成 16 年～17 年年度
**：平成 18 年度

A. 研究目的

多くのがん治療では有害事象を避けられない。このため、がん患者は常に QOL を犠牲にしながら治癒を得ていると言える。また、不幸にして非治癒となった場合は、がんの病勢進行に伴う様々な身体症状の出現が、がん患者の QOL を著しく障害し、精神的身体的な苦痛を一層助長する結果を招来する。本研究はこの様ながん患者の身体的 QOL の障害を最小限にとどめるための様々な治療法を開発することで、がん患者の社会的復帰や日常生活の質の向上に寄与することを目的としている。

B. 研究方法

研究の方向性は以下の二点に大別される。一つは、治癒可能例に対して根治性を犠牲にせずに機能温存や臓器温存を可能とする外科的あるいは内科的治療法の開発であり、他の一つは、がんの治療あるいは病勢進行に伴って損なわれる患者の QOL の障害を最小化するための各種治療法の開発である。

これらは、いずれも日常診療の中での問題意識や創意工夫を基盤として発想されるいわゆる臨床研究の範疇であり、基本的には薬剤開発に準拠して、第 I 相試験に相当する feasibility

試験から、第Ⅱ相試験に相当する有効性と安全性の検証試験、更には第Ⅲ相試験に相当する生命予後を検証する比較試験へと相別に評価が求められる。但し、第Ⅲ相の部分については、当班のみでは人的資源も限られることから、他の研究グループとの共同研究を行うこととしている。

（倫理面への配慮）

本研究では多くの開発的研究成果の臨床導入が図られる。係る場合は、各施設における倫理審査委員会の承認を得ると共に、従来の標準的治療法との利点欠点、他の治療選の可能性、当該治療法を選択しなかった場合の不利益のないこと等を明記した文書による同意を取得する。また、重篤な有害事象あるいは予想外の有害事象をみた場合は、直ちに当該施設長および各プロトコールに定める効果安全性評価委員会に報告し、研究続行の可否を決定する。

C. 研究成果

1. 身体的QOLの障害を最小化したがん治療法の開発

1）機能温存・臓器温存療法の開発

①喉頭温存手術の開発

従来、下咽頭がんに対する喉頭温存手術の適応は、喉頭切除を伴わない症例に限られていたが、本研究により、喉頭の部分切除例への適応拡大が図られた。この場合、披裂喉頭蓋ヒダの再構築、広い下咽頭腔の再建が誤嚥の回避に必須であること、これを可能とするには前腕皮弁が標準的な再建方法の一つであることを明らかにした。一方、2002 年に試作した NBI (narrow band imaging) 内視鏡は、下咽頭がんの早期発見を可能としているが、内視鏡治療の適応外とされた T0-2 症例に対する低侵襲手術（一次縫合手術）の適応範囲を定める目的で、遡及的検討（T1-2：34 例）を行った。その結果、梨状陥凹がんでは 1 側の梨状陥凹+披裂喉頭蓋ヒダ+喉頭蓋の患側基部まで、輪状後部がんでは、輪状後部から 1 側の梨状陥凹内側まで、下咽頭後壁では、粘膜欠損が 2～3cm 径で後壁に欠損が限局する場合と定められた。

②骨盤機能温存手術の開発

骨盤内臓全摘術が適応となる局所進行直腸がんに対する肛門・膀胱温存手術（排尿、排便、性機能の保持）を開発し、feasibility 試験を終了した。局所再発例もなく良好な治療成績を集積中であることから IC を取得した希望者に対しする一般治療としての展開を図っている。

③N0 乳がんに対する局所治療の開発

乳がんではセンチネルリンパ節転移陰性例と N0 例の予後は同等であり、腋窩温存が標準術式となり得る。センチネル陰性例に対する縮小手術の進化を図る第一歩として、ラジオ波による局所破壊治療の feasibility trial（目標症例数：25 例）を行っている。現時点までに評価の終了した 16 例中 14 例（88%）に、完全な腫瘍 viability の消失を確認しているが、治療不完全例はいずれも初期の治療技術の未熟に因るものであった。

④患肢温存手術の展開

四肢や骨盤部および肩甲帯に発生する骨や軟部の腫瘍に対して、より良好な患肢温存術を達成することを目的として、磁性体温熱療法（転移性骨腫瘍：16 例 17 骨）、アクリルオレンジを用いた光線力学療法（原発性悪性骨軟部腫瘍および難治性良性腫瘍：９２例）、および両者の併用療法（骨腫瘍：6 例）について有効性を検討した。磁性体温熱療法で治療した患者の術後患肢機能評価（MSTS 評価法）は良好で、特に合併症は認めなかった。Ｘ線評価でも骨転移部位の安定性は極めて良好でコント

ロール群に比較して有意にすぐれていた。光線力学療法を使用した縮小手術も良好な局所制御を示したが、両者を併用することにより患肢温存縮小手術の安全性が高まることが示された。現在、より高い完成度をめざして症例を集積中である。

⑤術後のリンパ浮腫を防止する子宮頚がん手術法の開発

子宮頚がん手術例の遡及的検討を行い手術時に骨盤無縫合とすることで、術後のリンパ浮腫の発生率が低下する可能性を明らかにした。現在、多施設共同研究による無作為化比較第Ⅱ相試験を計画中である。

⑥根治的臓器温存療法の開発

食道がんに対する放射線化学療法の遠隔成績は外科療法と同等であり、局所再発例や治療不完全例を制御できれば、外科治療例を凌駕し得ることになる。当班では、臓器温存療法を完結させる意味で、早期再発例や不完全治癒例に対する内視鏡的治療（光線力学的療法）成績の集積を図ってきた。治療後 18 ヶ月以上の経過が確認された 34 例の 1 年生存率は 62%、2 年生存率は 46%であった。無処置であればこれらの多くは1年以内に死に至ることを勘案すれば、本療法の有用性は十分に評価された。

手術不能頭頚部がんに対する新規治療法として、局所進行例に対する放射線化学療法（TS-1 + CDDP + RT）の第 I/II 相試験を行い 95% (21/22)と、きわめて高い CR 率を得た。現在、JCOG による多施設共同臨床試験にて再現性を検討中である。また、 転移再発例に対して TS-1 + CDDP + Docetaxel による三剤化学療法の第 I/II 相試験 (n=22) を行ったところ、64%と高い奏効率（CR;2, PR:11）が得られた。注目されたのは、原発巣の効果が不十分であった PR 例（n=11）に対し，放射線化学療法を追加したところ、5 例（45%）に CR が得られた点である。すなわち、本法が有効な induction chemotherapy となる可能性が示されたのである。本治療法についても、多施設共同研究としてその有効性を検証する予定としている。

進行乳がんで術前放射線化学療法が行われた 112 例中 45 例（40%）に病理学的 CR（がん巣の消失）が確認された。新たな臓器温存療法を提起すべく CR 例の特性を解析中である。

⑦新たな低侵襲治療の開発

動物（マウス）実験により、同種血管内皮細胞ワクチンが内皮細胞特異的な液性免疫及び細胞性免疫を誘導したところ、大腸がんの血行性転移を抑制することが明らかとなった。この結果に基づき、次年度からは内皮細胞ワクチン（ヒト臍帯静脈内皮細胞をグルタールアルデヒド固定したもの）の臨床試験（進行大腸癌手術患者を対象として週 1 回 x 4 週間、その後月 2 回投与）を開始する予定である。

2) 障害された QOL の回復をめざす各種治療法の開発

①形態・機能再建法の開発

頭頚部がん手術に際して下顎骨の合併切除を行なうと、咀嚼・構音・嚥下などの機能が障害されるばかりでなく、個人の識別ともなる顔面の形態に変形を生じる。下顎再建には骨（皮弁）を移植する方法と骨プレートを用いる方法があり、前者は安定性が高いが、侵襲が大きく、手術時間が長い等の短所があり、後者では侵襲が少なく、強靭であるが、術後の感染（プレートの露出）、固定の緩み等の短所が問題となっていた。後者の短所を克服すべく、筋膜付加腹直筋皮弁と再建プレートを用いた新たな下顎再建法を開発した。これまで8例に試みたが、何れも懸案であった下顎プレートの露出、感染等のトラブルはなく、プ

レートの利点である強靭性によって良好なQOLを得ている。

前立腺がんにより前立腺全摘術を行うと術後の性機能は廃絶される。PSA 値が 10 ng/ml 以上の中～高危険群を対象に、術中の電気刺激にて勃起神経を同定し、切除後に同部に腓腹神経を自家移植する機能開腹手術の feasibility 試験を開始した。現在22例を集積中（目標25例）である。機能回復には通常 12～18 ヶ月を要するため、その評価は未確定ではあるが、既に5例（23%）に機能回復の兆しが認められている。

②再生医学の臨床応用

局所進行腹部悪性腫瘍の手術に際して、根治性を追求すれば神経合併切除を余儀なくされ、術後の機能障害による患者 QOL の低下が避けられない。このジレンマを解決すべく、末梢神経を再建する神経再生チューブを開発した。犬を用いた動物実験できわめて良好な成績を確認したことから、臨床導入を試みた。これまで腹部悪性腫瘍で手術を行った9例に対して神経合併切除部位を神経再生チューブにて再建したところ、3ヶ月以内に神経切除による生涯の改善開始傾向が認められた。この機能改善の一部は共同筋の運動機能補完の関与もあるが、神経再生による改善も大と考えられ、臨床的にも有用と評価し得た。

一方、未だ動物実験（雑犬）の段階ではあるが、平滑筋の運動機能を含めた消化管（食道扁平上皮）の再生に成功した。具体的には「培養口腔粘膜」で再生基盤を作成し、チューブ状に巻く。次いで、栄養血管を再生させる目的で「再生食道基盤」のチューブを大網で巻いて、腹腔内に留置し、腹腔内で繭状の「食道」になるまで再生させる。10 日後に開腹して繭状の「再生食道」を取り出し、両端を切除して再びチューブ状にする。大網を付けたまま右開胸で食道下部に吻合して自家移植する、というものである。 本法は人への応用が容易であり、今後の更なる展開が期待される。

③IVR による症状緩和

椎骨転移の疼痛に対する経皮的椎体形成術」については、手技成功率：100%、有効率：73%、効果発現までの期間：2.4 日、と良好な成績で第Ⅰ/Ⅱ相試験を終了した。「上部消化管閉塞症例に対する経頚部食道胃管挿入術」も第Ⅱ相試験を終了し、手技成功率：100%、有効率91%と、良好な成績を得た（重篤な合併症は認めず）。「難治性腹水に対する経皮的腹腔-静脈シャント造設術」の第Ⅰ/Ⅱ相試験は引き続き継続中である。

D. 考察

本研究班はがん患者の身体的 QOL の向上を目的とした各種の根治的、あるいは姑息的治療法の開発を行おうとするものであるが、QOL 向上は全てのがん患者の希求するところであり、可及的に速やかな普及が求められる。しかし、広く普及を図るには開発した治療法技術の妥当性、再現性、安全性、有効性などを検証する臨床試験が不可欠である。

得られた研究成果をみると、各課題の進行状況はかなり異なっており、手技の安定化や fiasibility の検証が必要な、きわめて初期段階にあるものから、多数例の prospective study による評価が求められるものまで様々である。例えば、下顎再建プレートについては未だ数例の経験であり、骨盤内臓全摘術に代わる直腸がんの肛門膀胱温存手術についても漸く feasibiity 試験を終えた段階である。また、N0 乳がんに対する局所破壊療法や前立腺全摘例に対する腓腹神経移植術についても、漸く安定した技術を獲得し得た段階である。

これに対して、下咽頭がんに対する喉頭機能温存術の適応拡大、食道がんの根治的放射線療法後の内視鏡的サルベージ療法などについては手技的に既に安定しており、多数例を用いた後期第Ⅱ相試験による有効性（近接効果）と安全性の確認が求められている。さらに、症状緩

和を目的としたIVR技術については、一部では既に臨床試験を終了しており、リンパ浮腫の予防手術についても臨床試験による今後の評価スケジュールが確定している。この様に、普遍化をめざす進捗状況にはかなりの差がみられるが、何れの課題も着実に進展しており、臨床試験やprospective studyにより、遠からず結論が示されるものと思われる。

一方、再生医学の臨床応用に関しては、神経管を用いた神経再生は既に臨床導入を果たしており、動物実験ではあるが、自己細胞の培養に基づいた消化管（扁平上皮）の再生についても、自己細胞を基盤としていることから臨床応用も近いものと思われる。ことに再生した消化管は運動機能も具備していることから、肛門の形成や代替食道など、当班内の研究者による幅広い臨床応用が期待されている。

なお、本研究班では外科的治療などの手技に係わる側面については、臨床試験に先立ってDVDライブラリーなどを作成し、新規開発技術の普及を図ることとしている。

E. 結論

機能温存手術や臓器温存療法はがん患者の身体的QOLの向上に寄与し得るが、手技の安定化（標準化）と根治性の評価が課題である。また、外科手術や病勢の進行によって招来される患者QOLの障害についても、これを軽減する様々な支持療法の開発が可能である。この場合、生存をendpointとしていないことから第II相比較試験でも有効性評価が可能である。その意味で、臨床試験の合理的な設定が課題となる。

F. 健康危険情報

今期の研究期間中に健康危険情報は入手されなかった。

G. 研究発表

1.論文発表

1) Okuno T, Yoshida S, et al. Early colon cancers detected by FDG-pet: a report of two cases with immunohistochemical investigation. *Hepatogastroenterology* . 51(59): 1323-25, 2004.

2) Yoshida S. Cancer Care in Japan. Cancer Reviews: Asia-pacific; 2: 93-9, 2004.

3) Sano Y, Yoshida S, et al. A novel endoscopic device for retrieval of polyps resected from the colon and rectum. *Gastrointest Endosc* .59(6):716-19, 2004.

4) Gono K, Yoshida S, et al. Appearance of enhanced tissue features in narrow-band endoscopic imaging. *J Biomed Opt* .9(3):568-77,2004.

5) Sano Y, Yoshida S, and the Japan Polyp Study Workgroup. A multicenter randomized controlled trial designed to evaluate follow-up surveillance strategies for colorectal cancer: the Japan Polyp Study. *Dig Endosc* .16(4):376-8, 2004.

6) Fu KI, Yoshida S, et al. Chromoendoscopy using indigo-carmine dye-spraying with magnifying observation. Is the most reliable method for differential diagnosis between non-neoplastic and neoplastic colorectal lesions? A prospective study. *Endoscopy* 36(12):1089-93, 2004.

7) Machida H, Yoshida S, et al. Narrow band imaging for differential diagnosis of colorectal mucosal lesions: a pilot study. *Endoscopy* .36(12):1094-8, 2004.

8) Muto M, Yoshida S, et al. Squamous cell carcinoma in situ at oropharyngeal and hypopharyngeal mucosal sites. *Cancer* .101(6):1375-81,2004.

9) Muto M, Ohtsu A, Yoshida S. Treatment

strategies for esophageal stricture before or after chemoradiotherapy for advanced esophageal cancer. *Digestive Endoscopy*.16:S5-S8, 2004.

10) Yoshida M, Yoshida S, et al. Long-term Survival and Prognostic Factors in Patients with Metastatic Gastric Cancer Treated with Chemotherapy in the Japan Clinical Oncology Group (JCOG) Study. *Jpn J Clin Oncol* .34(11):654-9,2004..

11) Tahara M, Yoshida S, et al. Expression of thymidylate synthase, thymidine phosphorylase, dihydropyrimidine dehydrogenase, E2F-1, Bak, Bcl-X, and Bcl-2, and clinical outcomes for gastric cancer patients treated with bolus 5-flurorouracil *Oncology Report* .11(1): 9-15, 2004.

12) Yamao T, Yoshida S, et al. Phase II study of sequential methotrexate and 5- fluorouracil chemotherapy against peritoneal disseminated gastric cancer with malignant ascites: a report from the Gastrointestinal Oncology Group of the Japan Clinical Oncology Group, JCOG9603 trial. *Jpn J Clin Oncol* .34(6): 316-22, 2004.

13) 吉田茂昭: Editorial. 早期大腸癌 8(3):177-178、2004.

14) 吉田茂昭:食道癌の治療—課題の所在と今後の展開. Modern Physician 24(1):5-11、2004.

15) Muto M, Yoshida S, et al. Endoscopic mucosal resection in the stomach using the Insulated -Tip needle knife. *Endoscopy* .37: 178-82, 2005.

16) Sano Y, Yoshida S, et al. Optical/digital chromoendoscopy during colonoscopy using narrow band imaging system. *Dig Endosc* (in press)

17) Fu KI, Yoshida S, et al. Hazards of endoscopic biopsy for flat adenoma before endoscopic mucosal resection: a case report. *Dig Dis Sci* .50(7): 1324-7, 2005.

18) Muto M, Yoshida S, et al. Narrow band imaging: a new diagnostic approach to visualize angiogenesis in superficial neoplasia. *Clinical Gastroenterology and Hepatology* .3(7): 16-20, 2005.

19) Muto M, Yoshida S, et al. Risk of multiple squamous cell carcinomas both in the esophagus and the head and neck region. *Carcinogenessis* . 26(5): 1008-12, 2005.

20) Yano T, Yoshida S, et al. Distribution and prevalence of colorectal hyperplastic polyps using magnifying pan-mucosal chromoendoscopy and its relationship with synchronous colorectal cancer: A prospective study. *J Gastro Hepatol* .20(10): 1572-7, 2005.

21) Katada C, Yoshida S, et al. Local recurrence of squamous cell carcinoma of the esophagus after EMR. *Gastrointest Endoscpy.* 61(2): 219-25, 2005.

22) Nagashima F, Yoshida S, et al. Japanese nation-wide post marketing survey of S--1 in patients with advanced gastric cancer. *Gastric Cancer*. 8(1): 6-11, 2005.

23) Yano T, Yoshida S, et al. Photodynamic therapy as salvage treatment for local failures after definitive chemoradiotherapy for esophageal cancer *Gastrointestinal Endoscopy.* 62: 31-6, 2005.

24) Tahara M, Yoshida S, et al. Clinical impact of criteria for completes response (CR) of primary site to treatment of esophageal cancer *Jpn J Clin Oncol.* 35: 316-23, 2005.

25) Fu KI, Yoshida S, et al. Pneumoscrotum: a rare manifestation of perforation associated with

therapeutic colonoscopy. *World Gastroenterol.* 11(32): 5061-3, 2005.

26) Nagashima F, Yoshida S, et al. Biological markers as a predictor for response and prognosis of unresectable gastric cancer patients treated with irinotecan and cisplatin. *Jpn J Clin Oncol.* 35(12): 714-9,2005.

27) Fu KI, Yoshida S, et al. Incidence and localization of lymphoid follicles in early colorectal neoplasms. *World J Gastroenterol.* 11(43): 6863-6, 2005.

28) 吉田茂昭:臨床医学の展望 癌の化学療法(内科的).日本醫事新報 4222:14-26、2005.

29) 武藤 学、落合淳志、海老原敏、吉田茂昭、他:表在性の中・下咽頭癌の拡大内視鏡診断 NBIも含めて. 胃と腸 40(9);1255-69、2005.

30) 吉田茂昭:胃癌、大腸癌に対する化学療法. 総合臨牀 54(9);2469-74、2005.

31) 武藤 学、高橋真理、吉田茂昭、他:中・下咽頭表在性癌の微小血管による診断. 消化器内視鏡 17(12); 2061-8, 2005.

32) 吉田茂昭: Editorial. 早期大腸癌 9(4):313-4, 2005.

33) 吉田茂昭: 胃癌化学療法の歴史的変遷と今後の課題. 胃と腸 40(7); 975-6, 2005.

34) Akasu T, Moriya Y, Ohashi Y, Yoshida s, et al. Adjuvant chemotherapy with Uracil-Tegafur for pthological stage III rectal cancer after mesorectal excision with selective lateral pelvic lymphadenectomy: A multicenter randomized controlled trial. JJCO 36(4)237-44.2006.

35) Ohtsu A, Yoshida S, Saijo N. Disparities in gastric cancer chemotherapy between the east and west. J Clin Oncol. 10;24(14)2188-96.2006.

36) Ashida A, Boku N, Yoshida S, et al. Expression profiling of esophageal squamous cell carcinoma patients treated with definitive chemoradiotherapy: Clinical implications. Int J Oncol. 28(6):1345-52.2006.

37) Yoshida S, Kozu T, Gotoda T, et al. Detection and treatment of early cancer in high-risk populations: Best Practice & Research Clinical Gastroenterology 20(4)745-65.2006.

38) Yoshida S. Is Japan conquering the disease of gastric cancer? Asia-Pacific Journal of Clinical Oncology 2:153-5 2006.

39) 武藤学、割田悦子、吉田茂昭、他: 1.早期癌に対する内視鏡治療 1)中・下咽頭 胃と腸 41(4)459-65.2006.

40) 吉田茂昭: 臨床医学の展望 癌の化学療法(内科的).日本醫事新報 4272:13-28,2006.

41) 吉田茂昭: Editorial.拡大内視鏡による質的診断の進歩について 早期大腸癌 10(3):181-2,2006

42) 吉田茂昭、浅香正博:消化器癌治療における内科医の役割 対談 Frontiers in Gastroenterology 11(3)187-95.2006.

43) 浅田由樹、武藤学、吉田茂昭、他: 食道病変:色素内視鏡による鑑別診断ーNBI との対比および併用の有用性ー 消化器内視鏡 18(12):1842-8.2006.

44) 吉田茂昭:胃癌の化学療法の first line と second line 日消誌 104(2):171-6.2006.

45) Sang-Chul Lim, R.Hayashi, et al. PredictiveMarkers for Late Cervical Metastasis in Stage I and II Invasive Squamous Cell Carcinoma of the Oral Tongue, Clinical Cancer Research, 10:166-172.2004.

46) 山﨑光男、林 隆一、他:頸部郭清術の範囲—喉頭癌の場合—、JOHNS、20(9):1420-1421.2004.

47) 櫻庭 実、林 隆一、他:特集 下咽頭・頸部食

道の再建 喉頭温存手術における下咽頭再建、形成外科、47(11):1227-1233.2004.
48) 松浦一登、林 隆一、他:当科で経験した下眼瞼悪性腫瘍 2 症例—malar flap と硬口蓋粘骨膜を用いた眼瞼再建—、頭頸部外科、14(2):197-201.2004.
49) 木股敬裕、林 隆一、他:【総説】国立がんセンターにおけるチーム医療の現状、頭頸部癌、30(3):401-406.2004.
50) 松浦一登、林 隆一、他:舌扁平上皮癌一次治療症例(274 例)の手術治療成績、頭頸部癌、30(4):550-557.2004.
51) 上條朋之、林 隆一、他:頸部食道がんの治療成績とその検討、頭頸部腫瘍、30(1):61-66.2004.
52) 林 隆一、海老原 敏:ビデオシンポジウム 頸胸部領域における先端的外科手術 下咽頭がんにおける喉頭を温存した外科療法、日気食会報、55(2):142-143.2004.
53) 櫻庭 実、林 隆一、他:頭頸部再建術後の全身合併症の検討、耳鼻と臨床、50(補1):72-76.2004.
54) 木股敬裕、林 隆一、他:頭頸部再建における穿通枝皮弁の適応、日本マイクロ誌、17:290-294.2004.
55) Sarukawa S, Hayashi R ,et al.: Standardirzation of Free Jejunum Transfer After Total Pharyngolaryngoesophagectomy. Laryngoscope 116:976-981, 2006
56) 武藤 学、林 隆一、他：各論 1.早期癌に対する内視鏡治療 1 中・下咽頭 胃と腸 41 (4) ：459-465、2006
57) 三梨桂子、林 隆一、他：咽頭癌領域癌の診療-癌の病態 内視鏡治療 ＣＲＴ 消化器内視鏡 18 (9) ：1380-1388、2006
58) 林 隆一：頭頸部がんの再建外科 医療 60 (4) ：248-253、2006
59) 櫻庭 実、林 隆一、他：下顎再建プレートと遊離組織移植を用いた下顎再建例の検討 日本マイクロサージャリー学会会誌 19 (3) ：357-362, 2006
60) 富所雄一、林 隆一、他：喉頭垂直部分切除例の検討 頭頸部癌 32 (3) ：355-359、2006
61) Hasebe T, Sasaki S, Imoto S, et al. Histological characteristics of tumor in vessels and lymph nodes are significant predictor of progression of invasive ductal carcinoma of the breast: a prospective study.Hum Pathol.35: 298-308,2004.
62) Imoto S,Wada N, Murakami K, et al. Prognosis of breast cancer patients treated with sentinel node biopsy in Japan Jpn J Clin Oncol.34. 452,2004.
63) Hasebe T, Sasaki S, Imoto S, et al. Pognostic significance of the intra-vessel tumor characteristics of invasive ductal carcinoma of the breast: a prospective study Virchows Arch.444: 20-27, 2004.
64) Wada N, Imoto S, Hasebe T, et al. Eluation of intraoperative frozen section diagnosis of sentinel lymph nodes in breast cancer. Jpn J Clin Oncol.34: 3-117, 2004.
65) 井本 滋: 乳癌のセンチネルリンパ節微小転移の意義 外科 66 548-552 2004
66) 井本 滋, 和田徳昭, 山内稚佐子: 乳癌のSNNS：臨床応用の現況と多施設共同試験 臨床外科 59 559-562 2004
67) 山内稚佐子, 井本 滋, 和田徳昭, 他：乳癌手術 2023 例における術後合併症の検討 日臨外会誌 65 2833-2838 2004
68) Wada N, Imoto S, Yamauchi C, Hasebe T, Ochiai A, Ebihara S. Correlation between

concordance of tracers, order of harvest, and presence of metastases in sentinel lymph nodes with breast cancer. Ann Surg Oncol. 12: 497-503; 2005.

69) Sugawara Y, Akechi T, Okuyama T, Matsuoka Y, Nakano T, Inagaki M, Imoto S, Fujimori M, Hosaka T, Uchitomi Y. Occurrence of fatigue and associated factors in disease-free breast cancer patients without depression. Support Care Cancer. 13: 628-636; 2005.

70) Hasebe T, Sasaki S, Imoto S, Wada N, Ishii G, Ochiai A. Primary tumour-vessel tumour-nodal tumour classification for patients with invasive ductal carcinoma of the breat. Br J Cancer. 92: 847-856; 2005.

71) Wada N, Imoto S, Yamauchi C, Hasebe T, Ochiai A. Predictors of tumour involvement in remaining axillary lymph nodes of breast cancer patients with positive sentinel lymph node. Eur J Surg Oncol.32: 29-33; 2004.

72) 井本滋:乳癌に対する広範囲切除とセンチネルリンパ生検 臨床と研究 82;1654-1657、2005.

73) 井本 滋, 和田 徳昭, 三井 洋子:乳癌におけるセンチネルリンパ節の診断と治療への応用 日本リンパ学会誌 28;102-104, 2005.

74) Wada N, Imoto S, Yamauchi C, Hasebe T, Ochiai A: Predictors of tumour involvement in remaining axillary lymph nodes of breast cancer patients with positive sentinel lymph node. Eur J Surg Oncol. 2006;32:29-33.

75) Imoto S, Ochiai A, Okumura C, Wada N, Hasebe T: Impact of isolated tumor cells in sentinel lymph nodes detected by immunohistochemical staining. Eur J Surg Oncol 2006;32(10):1175-1179.

76) Yamauchi C, Hasebe T, Iwasaki M, Imoto S, Wada N, Fukayama M, Ochiai A: Accurate assessment of lymph vessel tumor emboli in invasive ductal carcinoma of the breast according to tumor areas, and their prognostic significance. Hum Pathol. 2007;38(2):247-259.

77) Inagaki M, Yoshikawa E, Matsuoka Y, Sugawara Y, Nakano T, Akechi T, Wada N, Imoto S, Murakami K, Uchitomi Y: Smaller regional volumes of brain gray and white matter demonstrated in breast cancer survivors exposed to adjuvant chemotherapy. Cancer 2007;109(1):146-156.

78) Wada N, Sakemura N, Imoto S, Hasebe T, Ochiai A, Moriyama N. Sentinel node biopsy in primary breast cancer: Radioactive detection and metastatic disease. Eur J Surg Oncol 2007(in press).

79) 井本 滋, 和田 徳昭: センチネルリンパ節生検のガイドライン. 臨床外科 2006; 61(3):309-311.

80) 井本 滋: 乳癌に対する至適腋窩リンパ節郭清. 外科 2006; 68(8):924-929.井本 滋: センチネルリンパ節生検による腋窩リンパ節郭清の省略.Pharma Medica 2006; 24(11):19-21.

81) 井本 滋: センチネルリンパ節生検の進め方.コンセンサス癌治療 2007; 6(1): 30-31.

82) 井本 滋: センチネルリンパ節生検のガイドライン. 乳腺疾患の臨床. 坂元吾偉, 野口昌邦編 金原出版, 東京, 2007: pp234-236.

83) Watanabe T, Kiyomatsu T, Kanazawa T, Tada T, Komuro Y, Tsurita G, Muto T, Nagawa H. Chemoradiotherapy for rectal cancer: current status and perspectives. Int J Clin Oncol 9(6):475-483, 2004.

84) Kinoshita H, Watanabe T, Yanagisawa A,

Nagawa H, Kato Y, Muto T. Pathological changes of advanced lower-rectal cancer by preoperative radiotherapy. Hepatogastroenterology 51(59):1362-1366,2004.

85) Komuro Y, Watanabe T, Hosoi Y, Matsumoto Y, Nakagawa K, Suzuki N, Nagawa H. Prognostic significance of Ku70 protein expression in patients with advanced colorectal cancer. Hepato-Gastroenterol 52(64):995-998 ,2005.

86) K. Koda, N. Saito, K. Oda, N. Takiguchi, H. Sarashina, M. Miyazaki. Evaluation of lateral lymph node dissection with preoperative chemo-radiotherapy for the treatment of advanced middle to lower rectal cancers. Int J Colorectal Dis 19:188-194,2004.

87) N. Saito, M. Ono, M. Sugito, M. Ito, M. Morihiro, C. Kosugi, K. Sato, M. Kotaka, S. Nomura, M. Arai, T. Kobatake. Early results of intersphincteric resection for patients with very low rectal cancer an active approach to avoid a permanent colostomy. Dis Colon & Rectum 47:459-466, 2004.

88) C. Kosugi, N. Saito, Y. Kimata, M. Ono, M. Sugito, M. Ito, K. Koda, M. Miyazaki. Rectovaginal Fistulas after Rectal Cancer Surgery: Incidence and Surgical Repair by Gluteal-Fold Frap Repair. Surgery (in press).

89) C. Kosugi, N. Saito, K. Murakami, K. Koda, M. Ono, M. Sugito, M. Ito, A. Ochiai, K. Oda, K. Seike, M. Miyazaki. Positron emission tomography for preoperative staging in patients with locally advanced or metastatic colorectal adenocarcinoma in lymph node metastasis: correlation with histopathologic characteristics of lymph node. Word Journal of Surgery (in press

90) 齋藤典男、小野正人、杉藤正典、伊藤雅昭、鈴木孝憲、小林昭広：超低位直腸進行癌における肛門温存機能の試み、大腸癌・炎症性腸疾患－専門医から学ぶ最新治療－、東京（(株)ﾒﾃﾞｨｶﾙﾋﾞｭｰ）:94-107,2004.

91) 齋藤典男、鈴木孝憲、杉藤正典：骨盤外科の発展に向けて、京都府立医科大学雑誌 113(10):683-691,2004.

92) 伊藤雅昭、杉藤正典、小林昭広、鈴木孝憲、田中俊之、齋藤典男：肛門近傍の超低位直腸癌に対する括約筋部分温存術、－内肛門括約筋切除術（ISR）における手術手技－、手術 58(11):1827-1834,2004.

93) C. Kosugi, N. Saito, Y. Kimata, M. Ono, M. Sugito, M. Ito, K. Sato, K. Koda, M. Miyazaki. Rectovaginal fistulas after rectal cancer surgery: Incidence and operetive repair by gluteal-fold frap repair. surgery 137(3):329-336,2005.

94) K. Wakatsuki, K. Oda, K. Koda, K. Seike, N. Takiguchi, N. Saito, M. Miyazaki. Effects of Irradiation Combined with Cis-diamminedichloroplatinum (CDDP) Suppository in Rabbit VX2 Rectal Tumors. World journal of Surgery 29(3):388-395(2005.3).

95) Keiji Koda, Norio Saito, Kazuhiro Seike, Kimio Shimizu, Chihiro Kosugi, Masaru Miyazaki. Denervation of the neorectum as a potential cause of defecatory disorder following low anterior resection for rectal cancer. Dis Colon & Rectum 48(2):210-217(2005.2).

96) Matsushita, Y. Matsumura, Y. Morita, T. Akatsu, S. Fujita, S. Yamamoto, S. Onouchi, N. Saito, M. Sugito, M. Ito, T. Kazu, T. Minowa, S. Nomura, H. Tsunoda, T. Kakizoe. A new method for isolating colonocytes from naturally evacuated feces and its application to colorectal cancer

diagnosis. Gastroenterology 129:1918-1927(2005.12).

97) C. Kosugi, N. Saito, K. Murakami, K. Koda, M. Ono, M. Sugito, M. Ito, A. Ochiai, K. Oda, K. Seike, M. Miyazaki. Positron emission tomography for preoperative staging in patients with locally advanced or metastatic colorectal adenocarcinoma in lymph node metastasis: correlation with histopathologic characteristics of lymph node. HEPATO-GASTROENTEROL (2005) in press.

98) A. Kobayashi, N. Saito, M. Ono, M. Sugito, M. Ito. Indication for salvage surgery in locally pelvic recurrences of rectosigmoid colon and rectal cancers. Dis Colon & Rectum (2005) in press.

99) S Takahashi, M Konishi, T Nakagohri, N Gotohda, N Saito, T Kinoshita. Short Time to Recurrence After Hepatic Resection Correlates with Poor Prognosis in Colorectal Hepatic Metastasis. Jpn J Clin Oncol 36(6):368-375, 2006.

100) N Saito, Y Moriya, K Shirouzu, K Maeda, H Mochizuki, K Koda, T Hirai, Mi Sugito, M Ito, A Kobayashi, Intersphincteric Resection in Patients with Very Low Rectal Cancer. - A Review of the Japanese Experience –. Dis Colon & Rectum Vol.49No.10(suppl): 3-s22, 2006.

101) Fu K, obayashi A, Saito N, Sano Y, Kato S, kematsu H, Fujimori T, Kaji Y, Yoshida S. lpha-fetoprotein-producing olon cancer with atypical bulky lymph node metastasis. World J Gastroenterol 12(47):7715-7716, 2006.

102) S. Takahashi, M. Konishi, T. Nakagohri, N. Gotohda, T. Hanaoka, N. Saito, T. Kinoshita. Importance of intra-individual variation in tumour volume of hepatic colorectal metastases. European Journal of Surgical Oncology 32:1195-1200, 2006.

103) S Takahashi, T Kuroki, K Nasu, S Nawano, N Konishi, T Nakagohri, N Gotohda, N Saito, T Kinoshita. Positron emission tomography with F-18 fluorodeoxyglucose in evaluating colorectal hepatic metastasis doen-staged by chemotherapy. Anticancer Res. 26:4705-4712, 2006.

104) N. Saito, T. Suzuki, M. Sugito, M. Ito, A. Kobayashi, T. Tanaka, M. Kotaka, H. Karaki, T. Kobatake, Y. Tsunoda, A. Shiomi, M. Yano, N. Minagawa, Y. Nishizawa. Bladder-Sparing Extended Resection for Locally Advanced Rectal Cancer Involving the Prostate and Seminal Vesicles. Surgery Today, 2006(impress).

105) A Kobayashi, M Sugito, M Ito, N Saito. Predictors of successful salvage surgery in local pelvic recurrences of rectosigmoid colon and rectal cancers. Surgery Today, 2006(impress).

106) 古賀寛史、内藤誠二、松岡直樹、他： 局所進行前立腺がんに対する内分泌放射線併用療法におけるQOLの検討. 西日本泌尿器科 66 255-262, 2004

107) The expression and prognostic significance of bone morphogenetic protein-2 in patients with malignant fibrous histiocytoma
J Bone Joint Surg 86B:607-612 2004
Asano N Yamazaki T Seto M Matsumine A Yoshikawa H Uchida A

108) Calcium hydroxyapatite ceramic implants in bone tumor surgery
J Bone Joint Surg 86B:719-725 2004
Matsumine A Myoui A Kusuzaki K Araki N Seto M Yoshikawa H Uchida A

109) Thrombin Inhibitor, Argatroban, Prevents Tumor Cell Migration and Bone Metastasis
Oncology 67:166-173 2004
Asanuma K Wakabayashi H Hayashi T Okuyama N Seto M Matsumine A Kusuzaki k Uchida A

110) New cell lines chondrocytic phenotypes from human chondrosarcomaVirchow Arch 444:577-586 2004 Kudawara I Araki N Myoui A Kato Y Uchida A Yoshikawa H

111) Metastatic bone disease: pathogenesis and strategies for treatmentJ Orthop Sci 9:415-420 2004 Uchida A Wakabayashi H Okuyama N Matsumine A Kusuzaki K

112) Metastasis of malignant peripheral nerve sheath tumor to free vascularized myocutaneous flap Oncol Rep 13:295-297 2005Fukuda A Kusuzaki K Hirata H Matsubara T Seto M Matsumine A Uchida A

113) Periosteal Ewing's sarcoma treated by photodynamic therapy with acridine orange Oncol Rep 13-279-282 2005 Yoshida K Kusuzaki K Matsubara T Matsumine A Kumamoto T Komada Y Naka N Uchida A

114) Metastasis of malignant peripheral nerve sheath tumor to free vascularized myocutaneous flap
Oncol Rep 13:295-297 2005
Fukuda A, Kusuzaki K, Hirata H Matsubara T, Seto M, Matsumine A, Uchida A.

115) Periosteal Ewing's sarcoma treated by photodynamic therapy with acridine orange
Oncol Rep 13:279-282 2005
Yoshida K Kusuzaki K Matsubara T Matsumine A Kumamoto T Komada Y Naka N, Uchida A.

116) Clinical trial of photodynamic therapy using Acridine Orange with/without low dose radiation as new limb salvage modality in musculoskeletal sarcomas
Anticancer Research 25:1225-1236 2005
Kusuzaki K, Murata H, Matsubara T, Miyazaki S, Okamura A, Seto M, Matsumine A, Hosoi H, Sugimoto T, Uchida A.

117) Cytological properties of stromal cells derived from giant cell tumor of bone (GCTSC) which can induce osteoclast formation of human blood monocytes without cell to cell contact
J Orthop Res 23:979-987 2005
Nishimura M Yuasa K Mori K Miyamoto N Ito M Tsurudome M Nishio M Kawano M Komada H Uchida A Ito Y

118) Intraneural metastasis of a synovial sarcoma to a peripheral nerve
J Bone Joint Surg 87B:1553-1555 2005
Matsumine A Kusuzaki K Hirata H Fukutome K Maeda M Uchida A.

119) Tenascin-C levels in pseudosynovial fluid of loose hip prosthesis
Scand J Rheumatol 34:464-468 2005
Hasegawa M, Sudo A, Hirata H, Kinoshita N, Yoshida T, Uchida A.

120) Clinical outcome of a novel photodynamic therapy technique using acridine orange for synovial sarcoma
Photochemistry & photobiology 81:705-709 2005
Kusuzaki K, Murata H, Matsubara T, Miyazaki S, Shintani K, Seto M, Matsumine A, Hosoi H, Sugimoto T, Uchida A.

121) Matsubara T, Kusuzaki K, Matsumine A, Shintani K, Satonaka H, Uchida A. Acridine

orange used for photodynamic therapy accumulates in malignant musculoskeletal tumors depending on pH gradient. Anticancer Res.26:187-194,2006

122) Tomoda R, Seto M, Hioki Y, Sonoda J, Matsumine A, Kusuzaki K, Uchida A. Low-dose methotrexate inhibits lung metastasis and lengthens survival in rat osteosarcoma. Clin Exp Metastasis.22:559-564,2006

123) Nakazora S, Kusuzaki K, Matsubara T, Shintani K, Matsumine A, Fukutome K, Uchida A. Extraskeletal myxoid chondrosarcoma arising from the clavicle. Oncol Rep. 16: 115-118,2006.

124) Niimi R, Matsumine A, Kusuzaki K, Okamura A, Matsubara T, Uchida A, Fukutome K. Soft-tissue sarcoma mimicking large haematoma: a report of two cases and review of the literature. J Orthop Sci.14:90-95,2006.

125) Matsumine A, Kusuzaki K, Matsubara T, Okamura A, Okuyama N, Myyazaki S, Shintani K, Uchida A. Calcium phosphate cement in musculoskeletal tumor surgery. J Surg Oncol. 93:212-220,2006.

126) Shintani K, Matsumine A, Kusuzaki K, Matsubara T, Satonaka H, Wakabayashi T, Hoki Y, Uchida A Expression of hypoxia-inducible factor (HIF)-1alpha as a biomarker of outcome in soft-tissue sarcomas. Virchows Arch.;449:673-81,2006

127) Mastumine A, Shintani K, Kusuzaki K, Mastubara T, Satonaka H, Wakabayashi T, Uchida A. Expression of decorin, a small leucine-rich proteoglycan, as a prognostic factor in soft tissue tumors. J Surg Oncol. in press.

128) Satonaka H, Kusuzaki K, Matsubara T, Shintani K, Wakabayashi T, Matsumine A, Uchida A.Extracorporeal Photodynamic Image Detection of Mouse Osteosarcoma in Soft Tissues Utilizing Fluorovisualization Effect of Acridine Orange.Oncology.;70:465-473,2007

129) Hoki Y, Hiraku Y, Ma N, Murata M, Matsumine A, Nagahama M, Shintani K, Uchida A, Kawanishi S.iNOS-dependent DNA damage in patients with malignant fibrous histiocytoma in relation to prognosis.Cancer Sci.;98:163-8,2007

130) 新美　塁、楠崎克之、松原孝夫、松峯昭彦、加藤裕也、内田淳正　褐色細胞腫様の病理組織像を伴った非定型的脂肪肉腫の 1 例　骨・関節・靭帯　19(3);253-257, 2006

131) 松峯昭彦、楠崎克之、松原孝夫、内田淳正　軟部肉腫の遺伝子治療　細胞　38; 20-23, 2006

132) 楠崎克之、松原孝夫、里中東彦、若林　徹、松峯昭彦、内田淳正　ユーイング肉腫の診断のポイント　整形・災害外科 49;1277-1282, 2006

133) 松峯昭彦、楠崎克之、松原孝夫、内田淳正　軟部腫瘍診断の pitfall　整形・災害外科 49;1283-1288, 2006

134) 新美　塁、松峯昭彦、楠崎克之、内田淳正、福留寿生　悪性顆粒細胞腫の２例　整形・災害外科　49;869-872, 2006

135) 松峯昭彦、内田淳正　OA の原因遺伝子：アスポリン　リウマチ病セミナー XVII;168-173, 2006

136) 松峯昭彦、骨腫瘍に用いたカルシウムハイドロキシアパタイト人工骨の長期治療成績　整形外科　57;1785-1789, 2006

137) 松峯昭彦、内田淳正　軟部腫瘍の診断ー画像診断ー　最新整形外科学大系 20;52-56, 2007（中山書店）

138) 松峯昭彦、内田淳正　骨・軟部腫瘍の治療

－良性骨腫瘍の治療－　最新整形外科学大系　20;75-80, 2007（中山書店）

139）中塚貴志：口腔・下咽頭癌切除後の再建術式　カレントテラピー　22:17-21, 2004.

140）Eguchi T, Nakatsuka T, Mori Y, Takato T.: Total reconstruction of the upper lip after resection of a malignant melanoma. Scand J Plast Reconstr Surg Hand Surg., 39:45-47, 2005

141）Takushima A, Harii K, Asato H, Momosawa A, Okazaki M, Nakatsuka T.: Choice of osseous and osteocutaneous flaps for mandibular reconstruction. Int J Clin Oncol. 10:234-242, 2005.

142）Okazaki M, Asato H, Sarukawa S, Taskushima A, Nakatsuka T, Harii K.: Availability of end-to-side anastomosis to the external carotid artery using short-thread double-needle microsuture in free flap transfer for head and neck reconstruction. Ann Plast Surg. 56:171-175, 2006.

143）中塚貴志：口腔・下咽頭癌切除後の再建術式　カレントテラピー　22:17-21, 2004.

144）濱尾綾、加賀谷雅之、重松久夫、鈴木正二、福田正勝、馬越誠之、相浦靖晴、　猪野照夫、市岡滋、中塚貴志、坂下英明：当科における遊離組織移植術を用いた口腔顎顔面再建手術の検討　明海大学歯学雑誌 34:1-9, 2005.

145）Sarukawa S, Asato H, Okazaki M, Nakatsuka T, Takushima A, Harii K.: Clinical evaluation and morbidity of 201 free jejunal transfers for oesophagopharyngeal reconstruction during the 20 years 1984-2003. Scand J Plast Reconstr Surg Hand Surg., 40: 148-52,2006.

146）Sarukawa S, Sakuraba M, Kimata Y, Yasumura T, Uchiyama K, Hishinuma S, Nakatsuka T, Hayashi R, Ebihara S, Harii K.: Standardization of free jejunum transfer after total pharyngolaryngoesophagectomy. Laryngoscope., 116;976-81, 2006.

147）Ohura N, Ichioka S, Sudo T, Nakagawa M, Kumaido K, Nakatsuka T.: Dislocation of the bilateral mandibular condyle into the middle cranial fossa : review of the literature and clinical experience. J Oral Maxillofac Surg., 64;1165-72, 2006.

148）Fukuda M, Nakatsuka T, Kusama K, Sakashita H.: Patient with multiple primary carcinomas including 4 separate oral cancers; study of p53 mutations and their implications for management. J Oral Maxillfac Surg., 64:1672-9, 2006.

149）Maitoko K, Sasaki H. Gonadotropin-releasing hormone agonist inhibits estrone sulfatase expression of cystic endometriosis in the ovary, FERTILITY AND STERITY. 83:322-6,2004.

150）佐々木寛.：　人科悪性腫瘍における機能温存手術と今後の動向．看護技術 50:16-20, 2004.

151）上田和、山田恭輔、佐々木寛、他：　開腹法―横切開か縦切開か―産婦人科の実際 53:1747-55, 2004.

152）Tsukino H , Hanaoka T , Sasaki H , Motoyama H, Hiroshima M , Tanaka T , Kabuto M , Niskar AS , Rubin C , Patterson Jr. DG , Turner W , Needham L , Tsugane S , Associations between serum levels of selected organochlorine compounds and endometriosis in infertile Japanese women, Environmental Research 99:118-125, 2005

153）Tsuchiya M , Nakao H , Katoh T , Sasaki H , Hiroshima M , Tanaka T , Matsunaga T , Hanaoka T , Tsugane S , Ikenoue T, Association

between endometriosis and genetic polymorphisms of the estradiol-synthesizing enzyme genes *HSD17B1* and *CYP19*,Human Reproduction 20:974-978, 2005

154) 山田恭輔、上田和、斉藤元章、斉藤絵美、茂木真、高倉聡、新美芳樹、佐々木寛、落合和徳、田中忠夫. 卵巣癌腫瘍減量手術における消化管合併切除, 産婦人科手術 16 : 53-59, 2005

155) Takeishi M, Kojima M, Mori K, Kurihara K, Sasaki H. Primary intrapelvic lymphaticovenular anastomosis following lymph node dissection. Annals of Plastic Surgery 57: 300-4, 2006.

156) Tsukioka H, Hanaoka T, Sasaki H, Motoyama H, Hiroshima M, Tanaka T, Kabumoto M, Turner W, Patterson Jr. D.G, Needham L, Tsugane S. Fish Intake and serum levels of organochlorines among Japanese women. Sci Total Environ. 15; 359(1-3): 90-100, 2006.

157) Hagiwara A, Kin S, Yamagishi H, et al. Successful clinical application of PGA-tube for regeneration of peritoneal nerve removed during surgery for malignant tumor. J Kyoto Pref. Univ. Med. Vol 113, No.12, 863-866, 2004.

158) Nakase Y, Hagiwara A, Yamagishi H, et al. Tissue engineering of small intestinal tissue using collagen sponge scaffolds seeded with smooth muscle cells. Tissue Engineering 12(2), 2006

159) 神経合併切除を伴う直腸癌手術における神経再生の試み 萩原明於、阪倉長平、大辻英吾、三木恒治、久保俊一、山岸久一、中村達雄、清水慶彦、手術 61、p. 97-102, 2007.

160) Tateishi U, Nestor L. Muller, Johkoh T, Onishi Y, Arai Y, Satake M, Matsuno Y,Tobinai K: Primary mediastinal lymphoma. characteristic features of the various histological subtypes on CT. J Comput Assist Tomogr,28: 782-789, 2004.

161) Inaba Y, Kamata M, Arai Y, Matsueda K, Aramaki T, Takaki H: Cervical oesophageal stent placement via a retrograde transgastric route. The British Journal of Radiology, 77: 787-789, 2004.

162) Inaba Y, Arai Y: Transcatheter arterial embolization for external iliac artery hemorrhange associated with infection in postoperative pelvic malignancy.J Vasc Interv Radiol 15:283-287, 2004.

163) 荒井保明:緩和医療における狭窄対策. 臨牀消化器内科 19(1):81-89, 2004

164) 荒井保明:大腸癌肝転移に対する肝動注化学療法の位置づけ. 大腸疾患 NOW 2005, (監修:武藤徹一郎、編集:渡辺英伸、杉原健一、多田正大) 日本メディカルセンター:93-99, 2005

165) 荒井保明:消化器癌肝転移に対する動注化学療法. 臨牀消化器内科 20(2):189-197, 2005

166) Y.Shimizu, Y.Arai, et al.:Late complication in patients undergoing pancreatic resection with intraoperaive radiation therapy: Gastrointestinal bleeding with occlusion of the portal system. Journal of Gastroenterology and Hepatology 20: 1235-1240, 2005.

167) A.Hosokawa, Y.Arai, et al.: Hepatic Hemangioma Presenting Atypical Radiologic Findings:A Case Report. Radiation Medicine 23: 371-375, 2005.

168) U. Tateishi, Y. Arai, et al.: Prediction of Lung Adenocarcinoma Without Vessel Invasion: A CT Scan Volumetric Analysis. Chest Nov128: 3276-83, 2005.

169) U. Tateishi, Y.Arai,et al.: MRI features of

extraskeletal myxoid chondrosarcoma. Skeletal Radiol. Oct 12:1-7, 2005

170) U. Tateishi, Y. Arai, et al.: Incidence of multiple primary malignancies in a cohort of adult patients with soft tissue sarcoma. Jpn J Clin Oncol. Aug35: 444-52, 2005.

171) .Tateishi, Y.Arai, et al.: Myxo-inflammatory Fibroblastic Sarcoma: MR Appearance and Pathologic Correlation. AJR Am J Roentgenol Jun 184: 1749-53, 2005.

172) G.Iinuma, Y.Arai, et al.: Recent Advances in Radiology for the Diagnosis of Gastric Carcinoma. The Diversity of Gastric Carcinoma. Pathogenesis, Diagnosis, and Therapy. M.Kaminishi,K.Takubo,K.Mafune(Eds.) Springer: 221-232, 2005

173) U.Tateishi, Y. Arai, et al.:Glut-1 Expression and enhanced glucose metabolism are associated with tumor grade in bone and soft tissue sarcomas: a prospective evaluation by [F-18]-fluorodeoxyglucose positoron emission tomography. Eur J Nucl Med Mol Imaging (in press)

174) 荒井保明:消化器癌肝転移に対する動注化学療法.臨牀消化器内科 20:189-197, 2005.

175) 楠本昌彦、荒井保明、他:肺腫瘤病変に対する生検の適応についての考え方ー肺癌術前に確定診断は全例に必要かー. IVR 20:58-59, 2005

176) 荒井保明: 序文ー臨床試験技術習得のススメ. IVR 20:p42, 2005

177) 荒井保明、佐竹光夫、他: 癌緩和医療における Interventional radiology(IVR). 癌の臨床 51:213-220, 2005

178) 荒井保明: IVR(インターベンショナル・ラジオロジー). がん看護 10: 261-266, 2005

179) 荒井保明:大腸癌・肝動注化学療法. 綜合臨床 54:2081-2082, 2005

180) 荒井保明、山本清一郎:臨床研究に必要な統計「以前」の知識. IVR 会誌 20: 371-375, 2005

181) 荒井保明:大腸癌肝転移に対する肝動注化学療法の位置づけ. 大腸疾患 NOW 93-99, 2005.

182) Hyodo I, Shirao K, Arai Y, et al: A Phase II Study of the Global Dose and Schedule of Capecitabine in Japanese Patients with Metastatic Colorectal Cancer, Jpn J Clin Oncol, 36:410-417,2006.

183) Tateishi U, Yamaguchi U, Arai Y, et al: Staging performance of carbon-11 choline positron emission tomography /computed tomography in patients with bone and soft tissue sarcoma: Comparison with conventional imaging, Cancer Sci, 97:1125-1128, 2006.

184) Iguchi T, Inaba Y, Arai Y, et al.: Radiologic Removal and Replacement of Port-Catheter Systems for Hepatic Arterial Infusion Chemotherapy, AJR 187:1579-1584, 2006.

185) Tomiyama N, Yasuhara Y, Arai Y, et al.: CT-guided needle biopsy of lung lesions: Asurvey of severe complication based on 9783 biopsies in Japan: European Journal of Radiology 59:60-64, 2006

2.学会発表

1) 林隆一 2004. 01 第 14 回日本頭頸部外科学会（東京）「頭頸部腫瘍治療の controversy」

2) 林隆一 2004. 02 第 14 回日本気管食道科学会認定医
大会「下咽頭癌の治療の実際と治療成績」

3) 林隆一 2004. 06 第 28 回頭頸部腫瘍学会（福岡）「中咽頭癌の治療戦略」

4) 林隆一　2004. 11　第 56 回日本気管食道科学会総会（東京）「下咽頭癌の治療戦略

5) 林隆一　2006 年 1 月　第 16 回日本頭頸部外科学会　シンポジウム 3 下咽頭がんに対する拡大手術と縮小手術「下咽頭表在がんに対する治療の現状と問題点」

6) 林隆一　2006 年 9 月第 19 回日本口腔咽頭科学会総会　臨床セミナー2 舌根部腫瘍の診断と治療　「喉頭を温存した舌根部がんの手術」

7) 井本 滋: センチネルリンパ節生検：最近の知見から. 第28回神奈川県癌治療懇話会2005年3月3日.

8) 井本 滋, 和田 徳昭: I 期乳癌に対する primary ablation と sentinel node biopsy. 第105回日本外科学会定期学術集会2005年5月11日.

9) 井本 滋, 和田 徳昭, 山内 稚佐子, 長谷部孝裕: センチネルリンパ節生検の臨床応用と課題. 第 13 回日本乳癌学会総会 2005 年 6 月 10 日.

10) 井本 滋: 乳癌におけるセンチネルリンパ節の診断と治療への応用. 第29回日本リンパ学会総会2005年7月15日.

11) 井本 滋, 和田 徳昭: I 期乳癌を対象としたラジオ波焼灼治療の手技の確立と安全性に関する臨床試験. 第 1 回乳癌低侵襲治療研究会2005年9月17日.

12) 井本 滋, 和田 徳昭: 乳癌術後 5 年健存例における上肢後遺症. 第 7 回 Sentinel Node Navigation Surgery 研究会学術集会 2005 年 11 月 19 日.

13) 井本 滋: センチネルリンパ節生検. 第2回日本乳癌学会関東地方会 2005 年 11 月 26 日.

14) Imoto S, Atsushi Ochiai, Noriko Sakemura, Noriaki Wada, Takahiro Hasebe: Impact of isolated tumor cells in sentinel lymph nodes detected by immunohistochemical staining Presented at the 5th International Sentinel Node Conference November 2, 2006.

15) Imoto S, Kitajima M, Aiko T, Kitagawa Y: Current Status of Sentinel Node Navigation Surgery in Japan. Presented at the 5th International Sentinel Node Conference November 3, 2006.

16) 井本 滋, 愛甲 孝, 北島 政樹: センチネルリンパ節生検のガイドライン.第 14 回日本乳癌学会総会プレジデンシャルシンポジウム 2006年7月7日.

17) 井本 滋, 和田 徳昭, 酒村 智子: ラジオ波焼灼治療の臨床試験. 第 2 回乳癌低侵襲治療研究会口演 2006 年 7 月 8 日.

18) 井本 滋, 和田 徳昭, 落合 淳志, 長谷部 孝裕: 乳がんにおける血清 ErbB-2 (HER-2)測定の有用性. 第 65 回日本癌学会学術総会示説 2006 年 9 月 29 日.

19) 井本 滋, 和田 徳昭, 南 博信, 吉田 茂昭: 乳がんの個別化治療の現状と展望.第44回日本癌治療学会総会シンポジウム 2006 年 10 月 18 日.

20) 井本 滋, 和田 徳昭, 田中 智子, 酒村 智子: I 期乳癌に対するラジオ波焼灼治療の臨床試験:中間報告. 第 15 回クリニカル・ビデオフォーラム口演 2007 年 2 月 17 日.

21) 名川弘一、当科における下部直腸癌に対する術前放射線療法の治療成績と後期合併症. 大腸肛門病学会総会, 2004, 久留米.

22) Nagawa H. Therapeutic modalities for colorectal cancer. International Association of Surgeons and Gastroenterologists, 13th International Postgraduate Course, December 9, 2005, Athens, Greece.

23) 齋藤典男、鈴木孝憲、小野正人、杉藤正典、伊藤雅昭、佐藤和典、西澤雄介、小高雅人、野村 悟、小畠誉也、荒井 学、角田祥之、原発直腸癌における骨盤内臓全摘術の検討と回避の可能性について, 第 104 回日本外科学会定期学術集会 125,2004.

24) 佐藤和典、角田祥之、荒井 学、小畠誉也、野村 悟、小高雅人、西澤雄介、伊藤雅昭、杉藤正典、小野正人、齋藤典男、下部直腸 mp 癌に